

# 戦時下における東京女子医学専門学校の中国人留学生 — 1943-1944 年を中心に —

周 一 川

## はじめに

東京女子医学専門学校（以下東京女子医専）の中国人留学生に関する研究は、三崎裕子の「東京女医学校・東京女子医学専門学校中国人留学生名簿」<sup>①</sup>（以下三崎名簿）と「東アジアにおける近代女子医学教育の成立と展開——中国・朝鮮を中心として」<sup>②</sup>があげられる。特に三崎名簿は、『東京女医学校入学生登録簿』、『東京女子医学専門学校卒業生台帳』、『至誠会会員名簿』などによるものであり、信憑性が高い。しかし、その名簿は1942年までで終わっており、1943年以後のデータがない。「東アジアにおける近代女子医学教育の成立と展開——中国・朝鮮を中心として」の「表1 東京女医学校・女子医専の中国人留学生数」は1946年まで統計しているが、1943年から1946年までは0になっている。

筆者は長期間にわたり留学生名簿を収集した結果、日華学会が作成した1927-1944年度中国人留学生名簿（以下『名簿』）のすべてを手に入れ、満州国大使館が作成した1935-1943年度（1942年度を除く）『満州国留日学生録』（以下『学生録』）も入手することができた。これらの名簿から東京女子医専の1943年度在籍の留学生が判明し、1944年度もほぼ明らかになった。また、帰国後の留学生の追跡調査を行なって、東京女子医専の留学生にもお会いした。彼女たちは留学中の体験や帰国後のキャリアなどを教えてくださり、写真などの資料も提供して下さった。この追跡調査により、文献資料にほとんど記録されていない事実も数多く判明したのである。

本稿では、今まで不明であった1943年と1944年度の東京女子医専の中国人留学生のデータを明らかにし、元留学生たちへのインタビューに基づいてその留生活及び帰国後の行方についても考察を試みる。

## 一、1943-1944 年度東京女子医専の留学生

1900年に創立された東京女医学校（1912年から東京女子医学専門学校）は1924年までは日本唯一の女子医学教育機関であった。清朝末期から日本留学のブームが始まり、1908年に東京女医学校に入学した留学生も現れた。1925年から帝国女子医学専門学校なども創立されたが、東京女子医専を希望する留学生の数が一番多かった。

1934年末『中華医学雑誌』に掲載された陶善敏の「中国女子医学教育」に「女医学卒業生表（一部）」があり、その表から東京女子医専の中国女子医学教育への位置づけが窺える。その表では国内医学校（12校）、日本女子医学校（5校）、アメリカ医学校（9校）、カナダ医学校（2校）、イギリス医学校（1校）の順に並んでおり、総数は559名であった。卒業生数の多い順では、夏葛女子医学院214名、協和女子医学院57名、同徳医学院55名、東京女子医専54名、東南医学院46名であった<sup>③</sup>。上位

5位に入っていた中国以外の医学校は東京女子医専だけであり、他の外国医学校では卒業生がすべて10名以下であった。

東京女子医専が留学生を受け入れたことは戦時下にも継続され、「留学生総数は1942年までに200名以上に上り、そのうち卒業生数も107人を数えた。」<sup>4)</sup>戦時下に来日した留学生は「満洲国」以外では殆ど汪兆銘政権統治下の地域から来ていた。

下記の表は、今までの研究で判明していない1943と1944年に在籍していた留学生名簿で、その中の予科生の多数は統計した年と同年度の新生入生である。〈表1〉の名前の前に○がついているのは休学者であり、日華学会が名簿を作成した時点ではすでに帰国したと推測できる。

〈表1〉『名簿』の東京女子医専1944年度在籍「中華民国」留学生（27名）

|    | 姓名   | 年齢 | 省 県 (市) | 科  | 年級 | 出身学校           | 備考 |
|----|------|----|---------|----|----|----------------|----|
| 1  | 王淑雯  |    | 河南 濬    | 本科 | 4年 | 錦州女子師範         | 補給 |
| 2  | 李政子  | 23 | 湖北 武昌   | 〃  | 3年 | 湖北省立女子高級中学     | 官費 |
| 3  | 石 鏡  | 22 | 河北 行唐   | 〃  | 〃  | 北京師範大学女子附属中学   | 補給 |
| 4  | 倪華蓉  | 22 | 広東 広州   | 〃  | 〃  | 広東省立女子中学       | 官費 |
| 5  | 汪婉華  | 22 | 広東 広州   | 〃  | 〃  | 広東執信女子中学       |    |
| 6  | 陶 芸  | 23 | 江蘇 上海   | 〃  | 〃  | 北京市市立第一女子中学    | 補給 |
| 7  | ○嚴 邃 | 22 | 江蘇 上海   | 〃  | 2年 | 上海私立民光中学       | 補給 |
| 8  | ○郭美慧 | 24 | 河北 北京   | 〃  | 〃  | 天津市中西女子中学      | 補給 |
| 9  | 周華春  | 23 | 福建 閩侯   | 〃  | 〃  | 上海震旦女子文理大学附属中学 | 補給 |
| 10 | 黄玉懋  | 24 | 浙江 杭州   | 〃  | 〃  | 北京師範大学附属女子中学   | 補給 |
| 11 | 謝凡影  | 23 | 浙江 杭州   | 〃  | 1年 | 浙江省立女子中学       | 補給 |
| 12 | 謝冷紅  | 24 | 浙江 杭州   | 〃  | 〃  | 上海市立□□女子中学     | 補給 |
| 13 | 韓懿方  | 21 | 河北 北京   | 〃  | 〃  | 北京師大女附中卒業      | 補給 |
| 14 | ○顧曼茜 | 23 | 江蘇 無錫   | 〃  | 〃  | 南京国立模範女子中学     | 補給 |
| 15 | ○宋志中 | 24 | 山東 蓬萊   | 〃  | 〃  | 北京私立志成高級中学     | 公費 |
| 16 | ○何希韞 | 23 | 広東 順徳   | 〃  | 〃  | 広東省立広東大学一年修了   | 公費 |
| 17 | ○方長春 | 21 | 福建 福州   | 予科 | B  | 北京女子中学高中部      |    |
| 18 | 楊秀芳  | 23 | 河北 玉田   | 〃  | 〃  | 河北省通県女子師範卒業    | 公費 |
| 19 | ○王玉珍 | 24 | 河北 北京   | 〃  | 〃  | 北京市立女子高等中学     | 公費 |
| 20 | ○王淑雲 | 22 | 河北 北京   | 〃  | A  | 河北女子師範         |    |
| 21 | ○崔静娟 | 22 | 河北 北京   | 〃  | 〃  | 北京市立第二女中       | 補給 |
| 22 | ○佟惠光 | 22 | 河北 天津   | 〃  | 〃  | 天津私立中西女子中学     | 官費 |
| 23 | ○李雪竹 | 20 | 河北 北京   | 〃  | 〃  | 国立師範大学附属女子中学   | 官費 |
| 24 | 葉晴漪  | 20 | 広東 番禺   | 〃  | 〃  | 広東大学附属中学       | 官費 |
| 25 | 梁民玉  | 20 | 広東 南海   | 〃  | 〃  | 広東潔芳女子中学校      |    |
| 26 | 王 意  | 19 | 江蘇 上海   | 〃  | 〃  | 安徽省私立□正女子中学    |    |
| 27 | 盧浦珍  | 21 | 河北 呉橋   | 〃  | 〃  | 濱江省立ハルビン女子国民高校 |    |

『名簿』注：○印は病気其他ノ事故ノタメ長期缺席又ハ休学中ノ者。

備考欄ニ記載ナキハ自費生，補給トアルハ日本政府ヨリ学費ノ補給ヲ受ケル者。

筆者注：□は読めない文字；黒字は三崎名簿にない者。

出典：以下の資料により作成。

- 1, 『第 18 回 中華民国留日学生名簿』財団法人日華学会，昭和 19 年（1944 年），47-48 頁。
- 2, 三崎裕子「東京女医学校・東京女子医学専門学校中国人留学生名簿」辛亥革命研究会『辛亥革命研究』8，東京，1988 年，66-70 頁。

〈表 2〉『学生録』の東京女子医専 1943 年度在籍「満洲国」留学生（48 名）

|    | 氏名   | 年齢 | 本籍  | 学年  | 入学年月                 | 卒業予定                 | 出身学校       | 備考  |
|----|------|----|-----|-----|----------------------|----------------------|------------|-----|
| 1  | 孫桂蘭  | 25 | 関東州 | 研 3 | 1942, 10             | 1944, 9              | 大連羽衣高女     |     |
| 2  | 孫貴春  | 24 | 奉天  | 本 3 | 1940, 4              | 〃                    | 奉天市女子師範    |     |
| 3  | ○李世彰 | 25 | 錦州  | 〃   | 〃                    | 〃                    | 錦州女子国高     | 季世影 |
| 4  | ◎張景芬 | 22 | 〃   | 〃   | 〃                    | 〃                    | 錦州女子国高     | 趙景芬 |
| 5  | 傅 毅  | 24 | 新京  | 〃   | 〃                    | 〃                    | 哈爾濱女子国高    | 伝 毅 |
| 6  | ◎佟瑞芝 | 23 | 奉天  | 〃   | 〃                    | 〃                    | 奉天私立坤光国高   |     |
| 7  | 王紉卿  | 24 | 〃   | 〃   | 〃                    | 〃                    | 哈爾濱女子国高    | 王紉卿 |
| 8  | ◎孫玉貞 | 24 | 吉林  | 〃   | 〃                    | 〃                    | 奉天女子国高     |     |
| 9  | 趙慶蓉  | 24 | 奉天  | 〃   | 〃                    | 〃                    | 奉天女子国高     | 趙慶蓉 |
| 10 | 金玉琴  | 24 | 吉林  | 〃   | 〃                    | 〃                    | 吉林省立女子両級中学 |     |
| 11 | 魏淑蓮  | 24 | 関東州 | 〃   | 〃                    | 〃                    | 大連市神明高女    |     |
| 12 | 劉淑義  | 27 | 関東州 | 〃   | 〃                    | 〃                    | 旅順高等公学校師範  |     |
| 13 | 張静容  | 22 | 錦州  | 〃   | 〃                    | 〃                    | 新京敷島高女     |     |
| 14 | 寶蓮馥  | 21 | 奉天  | 本 2 | 〃                    | 1945, 9              | 奉天省立第一女子国高 | 寶蓮馥 |
| 15 | 趙迺才  | 20 | 濱江  | 〃   | 1941, 4              | 〃                    | 哈爾濱女子国高    |     |
| 16 | ◎李繼庸 | 22 | 奉天  | 〃   | 〃                    | 〃                    | 吉林省立女子国高   |     |
| 17 | 吳芳蕙  | 21 | 新京  | 〃   | 〃                    | 〃                    | 哈爾濱女子国高    |     |
| 18 | 王鐵錚  | 21 | 吉林  | 〃   | 〃                    | 〃                    | 吉林省立女子国高   |     |
| 19 | 李素琴  | 22 | 三江  | 〃   | 〃                    | 〃                    | 吉林女子国高     |     |
| 20 | 周鳳翔  | 22 | 吉林  | 〃   | 〃                    | 〃                    | 吉林女子国高     | 周鳳蘭 |
| 21 | ◎孫世珉 | 23 | 安東  | 〃   | 〃                    | 〃                    | 奉天坤光女子両級中学 |     |
| 22 | 李欲賢  | 23 | 奉天  | 〃   | 〃                    | 〃                    | 奉天坤光女子両級中学 |     |
| 23 | ◎楊鍾芬 | 23 | 奉天  | 〃   | 〃                    | 〃                    | 奉天女子国高     |     |
| 24 | 斐玉梅  | 22 | 奉天  | 〃   | 〃                    | 〃                    | (空白)       |     |
| 25 | 劉静安  | 23 | 関東州 | 本 1 | 〃                    | 1946, 9              | 大連高女       |     |
| 26 | 張素琴  | 19 | 吉林  | 〃   | 1942, 4 <sup>マ</sup> | 1945, 9 <sup>マ</sup> | 新京敷島高女     |     |
| 27 | 呂世昭  | 20 | 関東州 | 〃   | 〃                    | 1946, 9              | 新京敷島高女     |     |

|    |     |    |                  |    |         |         |           |     |
|----|-----|----|------------------|----|---------|---------|-----------|-----|
| 28 | 郝梅先 | 20 | 濱江               | 〃  | 〃       | 〃       | 哈爾濱第一女子国民 |     |
| 29 | 呂超俠 | 20 | 新京               | 〃  | 〃       | 〃       | 新京第一女子国高  |     |
| 30 | 謝慕媛 | 19 | 濱江               | 〃  | 〃       | 〃       | 吉林女子国高    | 謝慕媛 |
| 31 | 周鳳翔 | 19 | 奉天               | 〃  | 〃       | 〃       | 齊々哈爾女子国高  |     |
| 32 | 樓蟬影 | 19 | 龍江               | 〃  | 〃       | 〃       | 齊々哈爾女子国高  |     |
| 33 | 韓聯璧 | 21 | 濱江               | 〃  | 〃       | 〃       | 哈爾濱第一女子国民 |     |
| 34 | 葉卓如 | 20 | 奉天               | 〃  | 〃       | 〃       | 洗足高女      |     |
| 35 | 範喜華 | 19 | 錦州               | 予科 | 1943, 4 | 1947, 9 | 留学生予備校    |     |
| 36 | 張雅棋 | 20 | 北安               | 〃  | 〃       | 〃       | 留学生予備校    |     |
| 37 | 戚延齡 | 21 | 奉天               | 〃  | 〃       | 〃       | 留学生予備校    |     |
| 38 | 宋陸存 | 19 | 吉林               | 〃  | 〃       | 〃       | 留学生予備校    |     |
| 39 | 李鴻坤 | 19 | 安東               | 〃  | 〃       | 〃       | 留学生予備校    |     |
| 40 | 左秀雲 | 20 | 新京               | 〃  | 〃       | 〃       | 留学生予備校    |     |
| 41 | 薛啓貞 | 21 | 奉天               | 〃  | 〃       | 〃       | 留学生予備校    |     |
| 42 | 許広濤 | 20 | 奉天               | 〃  | 〃       | 〃       | 留学生予備校    |     |
| 43 | 柯若儼 | 20 | 錦州               | 〃  | 〃       | 〃       | 留学生予備校    |     |
| 44 | 趙松雲 | 19 | 奉天               | 〃  | 〃       | 〃       | 留学生予備校    |     |
| 45 | 鄂美英 | 21 | 龍江               | 〃  | 〃       | 〃       | 惠泉学園普通部   |     |
| 46 | 柯若儀 | 18 | 錦州               | 〃  | 〃       | 〃       | 錦州高女      |     |
| 47 | 張静姿 | 19 | 錦本 <sup>ママ</sup> | 〃  | 〃       | 〃       | 新京敷島高女    |     |
| 48 | 于梅春 | 20 | 閩東州              | 〃  | 〃       | 〃       | 金州女子高等公学校 |     |

『学生録』注：○ハ民生部補助費生 ◎ハ満洲帝国教育会貸費生 印無キハ自費生

筆者注：黒字は三崎名簿にない者。

備考は三崎名簿に記載されている氏名である。同一人物だと思われるが、文字が違っている。

出身校欄目の「国民高等学校」を「国高」に、「高等女学校」を「高女」に略する。

出典：以下の資料により作成。

1. 『満洲国留日学生録 昭和18年・康德10年度』駐日満洲国大使館, 昭和19年(1944年)1月発行, 27-30頁。
2. 三崎裕子「東京女医学校・東京女子医学専門学校中国人留学生名簿」辛亥革命研究会『辛亥革命研究』8, 東京, 1988年, 71-72頁。

「満洲国」留学生の費用種別は、年度によって異なっており、官費生以外に1938年の学席制が始まるまでには、「文費」と呼ばれる日本の外務省文化事業部の「学費補給」<sup>6)</sup>生があり、その数は少なくなかった。1935年度の学費補給生総数は380名であり、その中で「満洲国」の留学生は118名<sup>6)</sup>であった。1936年の「満洲国」学費補給生104名中女性は10名おり、1937年80名中女性は23名であった<sup>7)</sup>。1938年以後、文化事業部の「文費」はなくなり、その費用は「満洲国」学席設置へ移行された。1939年に官費と私費以外に日満文化学会補助費生と満洲鉦工技術員協会補助費生が始まって、1940年にこの二種類の補助費生が公費生として分類された。1941年からは官費と公費以外に満洲帝国教育会貸費生も始まり、女子留学生にも、貸費生8名がいた<sup>8)</sup>。貸費生であった李継庸は、「官費生は帰国

後、国の指示で仕事をしなければならなかったが、貸費生はそうではなかった。毎月の金額は50円で卒業後に返す規則であったが、自分が帰国してすぐに「満洲国」が滅亡したので、返さなくても済んだ<sup>9)</sup>と話っている。

〈表2〉に1944年「満洲国」留学生予備校からの新入生であった史延芳を加えると1944年までの「満洲国」留学生名簿がほぼ完成する。史延芳の手紙によると、第7期の留学生予備校の卒業生の中に20数名の女子がいたが、来日したのは7名だけであった。入学試験後、東京女子医専に合格したのは彼女だけで、ほかの6名のうち4名は大阪女子高等医専に、2名は帝国女医専に合格した<sup>10)</sup>。もちろん留学生予備校以外に入学した者がいる可能性は否定できない。〈表2〉の1943年新入生の中には留学生予備校卒業生10名以上に4名がいた。しかし、1944年に戦火が日本に近づいてきたことで日本留学を希望する学生がかなり減少し、1944年「満洲国」からの新入生は史延芳だけのようである。

## 二、医学の道——柯若儼と柯若儀姉妹を中心に——

### 1、元留学生たちとの出逢い

東京女子医専の元留学生と筆者が最初にお会いしたのは1994年のことであり、1944年に卒業生した王初卿である。王初卿へのインタビュー記録は拙著『中国人女性の日本留学史研究』<sup>11)</sup>に掲載されている。

2008年から私は「[満洲国]における女性の日本留学—1932～1945年—」(科研費基盤研究C:課題番号20510255)に関する研究を本格的に始め、存命中の元留学生をあらゆる方法で探していた。2009年度に留学生予備校同窓会が作成した1999年度『留学生予備校同学録』の名簿が手に入ったので、名簿に載っている61名の女子留学生及びその家族へアンケート調査票を同封した手紙を出した。その結果、15通の返信があり、内10通はアンケートに回答してくれていた。5通はその家族からの手紙で本人が重病で返信できないことや、すでに亡くなったことが書かれていた。住所不明などが原因で12通は戻ってきた。

2009年度に5回にわたって北京や東北地方に行き、連絡が取れた留学生にインタビューを行った。彼女たちは、留学事情や帰国後の状況を話してくれただけではなく、関連資料や貴重な写真も提供してくれた。さらに、『留学生予備校同学録』に名前を載せていない(留学生予備校に入らず日本に留学した)者を紹介してくれて、出逢った元留学生の総数は17名に増えた。17名の中東京女子医専の留学生は5名であり、柯若儼、柯若儀、史延芳へそれぞれの自宅でインタビューが実現したが、李継庸と趙松雲には、電話での聞き取り調査しかできなかった。

### 2、柯若儼と柯若儀姉妹の日本留学

柯若儼と連絡が取れたのは2009年9月のことであった。彼女から9月6日付詳しい内容を記入したアンケート調査表を、手紙ではなく、メールで送っていただいた(娘に頼んでパソコンで打って送信してもらった)。調査表の最後に「東京での滞在は二年余りだけで返信するかどうか迷ったため、すぐに返事をしなかった。しかし、その時期の女性が受けた差別、学問を求める過程での様々な困難をあなたに説明することができたら、たぶんあなたの著作に役に立つかもしれないと思い、答えることにした」と書いてあった。

瀋陽に住んでいた柯若儼に妹の柯若儀の連絡先などを教えていただいたので、すぐに大連医学大学附属一院に勤めている柯若儀に連絡を取り、2009年9月から文通を始めた。以来、数回にわたって、インタビュー調査(2010年8月15日;2010年8月16日;2015年1月4日;2015年1月5日;2015年3月30日)を行い、現在でも連絡を取り合っている。

柯氏姉妹の留學生活に関する回想は、文献資料にほとんど記録していない戦時下の留學の選択、戦乱の影響、帰国後の行方などの内容が豊富で、戦時下留學の実態を明らかにするためには不可欠なものである。

柯若儼（2011年1月25日死去）へのインタビューは2009年9月20日の一回きりであったが、彼女の優しい笑顔と優れた記憶力を今でも鮮明に覚えている。以下の柯若儼に関する内容は同氏からのアンケート調査表とインタビュー記録によるものである。

柯若儼は1924年9月16日に生まれ、瀋陽慎徳小学（6年）、錦州女子中学（その後、錦州女子高等学校に）（4年）で勉強した。

日本に留學したことがある父親は浙江省出身で、鉄道会社で勤めていた。母親は私塾で学んだことがあり、名著などをよく読んでいた。柯若儼は7人兄妹であり、そのうちの3人が欧米へ留學し、3人が日本留學をした。

柯若儼が医学への道を選んだのは母親の影響であった。母親は「鉄道関係の病院の女医と看護婦みたいにあなたたちも大きくなったら、医学を学びなさい」とよく言っていた。しかし、満洲地域では日系の満洲医学大学とハルビン医学大学の歯科専攻が極少数の女性を受け入れているだけであったから、医学を目指すなら、日本に行くしかなかった。日本に留學するために柯若儼は留學生予備校の入学受験を二回受けた。一回目は出身地に浙江省と書いたせいで入学できなかったが、翌年の受験のときには、出身地を満洲地域にして合格し、1942年入学の第6期生になった。留學生予備校は学制が一年で、第6期生の男子学生は文系と理系クラスを分けたのだが、女性は人数が少ないので分けることがなく、一緒に授業を受けた。卒業前に予備校の先生から留學校を勧めてもらい、卒業後、集団で来日した。

留學以後の状況について妹柯若儀が詳しく教えてくれたので、以下の内容は同氏へのインタビュー記録<sup>(12)</sup>、アンケート調査票、関係資料<sup>(13)</sup>及び手紙<sup>(14)</sup>によってまとめたものである。

「留學生規程」により、日本国法令による高等専門以上の教育施設を卒業した者は、留學予備教育も留學生認可試験も受けず留學できる。妹の柯若儀は日系の錦州高等女学校の学生であったが、4年生のとき「留學生認可」試験に合格し、姉とともに来日した。

拙稿「〔満洲国〕における女性の日本留學—概況分析—」<sup>(15)</sup>で触れたように、日本留學は「満洲国」の国策であり、厳しく管理されていた。毎年留學生予備校の卒業式が終わってからの1月ごろに、留學したい若者は集団で来日することになっていた。柯氏姉妹は1943年初100名以上の学生とともに同じ船で日本にやって来た。日本に来てからも「満洲国」の留學生は各学生会館に泊まり、集団で入学試験の準備をしていた。女子留學生は殆ど牛込女子留學生会館<sup>(16)</sup>に宿泊し、柯氏姉妹も会館で数か月生活（受験準備など）して、入学試験を受け東京女医専に合格した。

〈表2〉で分かるように、同年度に満洲から東京女医専への新入生は14名であったが、ほかには汪兆銘政権統治下の地域から来た新入生は8名<sup>(17)</sup>もいた。

### 3、東京女医専の記憶

東京女医専に入学した留學生はまず予科で一年基礎を学んだ。人数が多いため、AとBクラスとに分けられたが、学習内容はまったく同じであった。東京女医専は全寮制で八畳の部屋に学生は4~5名で住んでいた。一室に各年度の学生一人ずつと留學生一名、室長は最高年の学生が担当することになっていた。東京女医専の留學生は授業や試験も全て日本人学生と同様であり、優遇されたこともなく、差別もなく、平等に医学課程を学んだ。本科生になってから解剖、生理、生化などの授業が始まった。東京女医専の授業の中で一番印象が強かったのは解剖（伊東教授）と統計（吉岡博人教授）及び寄生虫であった。

全日授業中、警報がよく鳴り、地下室へ避難することもあった。解剖の実習は殆ど午後で、まず死体



写真1 東京女医専の留学生たち（1944年，正門）  
柯若傲（2列の右から3人目）；柯若儀（3列の右から2人目）  
柯若儀提供



写真2 東京女医専の留学生たち（1944年，キャンパス）  
柯若儀提供







写真3 柯若儀国立瀋陽医学院の卒業証書（1948年12月）  
柯若儀提供

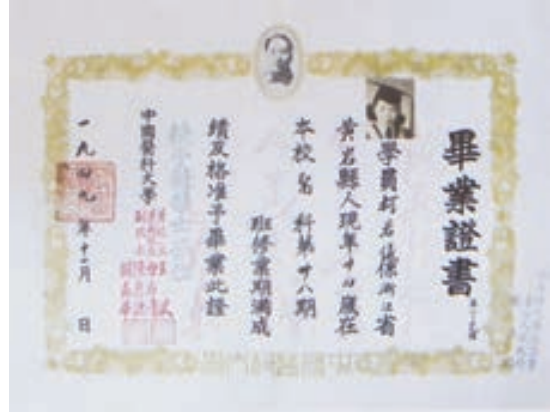


写真4 柯若儀中国医科大学の卒業証書（1949年11月）  
柯若儀提供

柯若儀は「私たちは戦時下で医学勉強を求め、その過程は極めて困難であったが、医者になりたい意志が強く、卒業までしっかり頑張ってきた。戦乱の時期だったが、それぞれの医学校で厳格な訓練を受けたので、医学の基礎をしっかりと固めた」と言った。

以上の事実から、「満洲国」後期の留学生は政権の変遷によって、日本、「満洲国」、中華民国、中華人民共和国に属する複数の高等教育機関で教育を受けた者が多いということが判明した。

2015年3月30日に筆者が柯若儀を再訪したとき、呂景波（柯若儀の夫、満洲医科大学・国立瀋陽医学院・中国医科大学時期の同級生）はこの時期について次のように補充してくれた。「満洲医科大学は本科と専門部に分けられ、学習年限は両方とも4年であった。本科は高校卒業（中学校と合わせて6年）を条件にしていたが、1937年からの新学制により、「満洲国」の国民高等学校の学制は4年となった結果、その卒業生たちは、専門部にしか入れなかった。呂景波は1943年に満洲医科大学専門部に入学した。専門部は一クラスだけで、50人のうち女性は3人であった。1945年春に日本から専門部に転学してきたのは柯氏姉妹などの女性以外に男性が3人であった。

呂景波も二つの卒業証書をもっているが、それは瀋陽以外の都市で実習し、その後、瀋陽（中国医科大学）に戻った者に限られたという。1948年に瀋陽は共産党の第4野戦軍に包囲され、国立瀋陽医学院の一部は北京に行き、北京弁事処が成立し、学生の募集も一回した。しかし、国民党の敗退によって、北京も危なくなり、1948年秋に急いで卒業証書を配ることになった。天津で実習している呂景波たちはその時期に卒業証書もらったようである。1949年1月呂景波一行は天津から瀋陽に戻り、中国医科大学の学生になって、2月から数か月の政治学習が始まり、その後数か月の実習を経て中国医科大学を卒業した。〈表3〉の戚延齡は天津で実習が終わった後、中国医学大学に戻らず、そのまま病院で勤めていたので、国立瀋陽医学院の卒業証書だけであった。瀋陽で実習していた者は、そのまま中国医科大学の学生になり、国立瀋陽医学院の卒業証書はないはずだと呂景波が回想した。

## 5. 新中国の医者として

柯若儀は中国医学大学を卒業してから、そのまま中国医科大学（瀋陽）の内科に勤めていた。1954年に夫である呂景波の仕事の異動に合わせて、大連医科大学の附属一院の内科へ転勤し、内科の主治医師、主任医師および教授、内科教研室主任などを歴任し、心臓内科の名医であった。1983年に「離休」<sup>19)</sup>になったが、心内科の特聘教授として89歳の現在までも勤め続けている。

文化大革命の時期に柯若儀もほかの知識人と同じく、いろいろな罪名で批判され、「思想改造」のた

め、農村に行かされたこともあった。病院の批判会の最中でも急患が来るたびに看護婦さんは批判会の中でも聞こえるように大声で「柯先生、急患ですよ！」と叫び、批判対象の柯若儀は許可をもらってすぐに駆けつけたことがよくあった。農村にいた時期に人間だけではなく、豚の病気も直したことがあると柯若儀は笑いながら話した。柯若儀はどんな時期でも手抜きすることがなく、患者にも信用されていた。

教え子やの同僚たちは、柯若儀が80歳のときに、盛大なお祝い会を開き、彼女が医学に従事する軌跡を記録した『从医執教60年記念冊』（2006年）を作成した。その中には東京女医専に留学した時の写真、留学前、帰国後の各時期の写真、国立瀋陽医学院と中国医科大学の卒業証書、数多い研究成果、さまざまな奨励証書などがならべられている。柯若儀の医学への貢献がよくわかる記念冊である。

2015年1月筆者は再び大連医学大学第一附属病院に柯若儀を訪ねた。診察を終えて足早に歩いてくる白衣の柯若儀を見て本当に感服した。柯若儀は教授室で本稿を確認し、いくつか補充してくださった。柯若儀の子供たちも孫たちも医者になり、柯若儀夫婦は、今大連で幸せに暮らしている。



写真5 柯若儀（89歳）と夫呂景波（90歳）夫婦  
2015年1月5日 周一川撮影

## 終わりに

〈表1〉と〈表2〉からいまままで不明であった東京女医専留学生の在学状況が明らかになった。「中華民国」から来た留学生を統計する日華学会は1944年度まで名簿を作成していた。その名簿から1944年度に在籍していたが、学校にいない者（〈表1〉を参照）がかなりいたことがわかった。それは、戦火が日本本土に近づいたので、留学生が学業を中断して帰国したためと推測できる。しかし、「満洲国」留学生の状況はそれと異なっていたことが柯若儀の回想から伺える。殆どの留学生は、1945年初に「満洲国」からの国内転学と帰国通知を受けてから日本を離れた。

戦時下で日本留学を選んだ中国人女性たちは、いかなる環境に置かれていたのか、なぜ日本に行き、何を学び、どのような体験をし、社会にどのような影響をもたらしたかについては柯氏姉妹の事例がその一側面を語っている。このような過去の真実を風化させずに明らかにすることは、「歴史の鏡」となり、大いに意義のあることであると確信している。

[付記]

本研究は Jsps 科研費 25360051 の助成を受けたものである。

注

- (1) 辛亥革命研究会『辛亥革命研究』8, 東京, 1988年, 63-72頁。
- (2) 吉田忠・深瀬泰旦編『東と西の医療文化』思文閣出版, 327-350頁。
- (3) 陶善敏「中国女子医学教育」『中華医学雑誌』第19巻第6期, 1934年12月, 851頁。
- (4) 三崎裕子「東京女医学校・東京女子医学専門学校中国人留学生名簿」辛亥革命研究会『辛亥革命研究』8, 東京, 1988年, 63頁。
- (5) 義和団事件賠償金の一部を利用しての中国人留学生に対する学費支給は, 1924年に日本政府の「対支文化事業」の一環として始まり, 「満洲国」が成立した後, 「対満文化事業」の主要事業として「満洲国」留学生にも学費支給が始まった。
- (6) 日華学会『日華学報』第53号, 1935年, 54頁。
- (7) 駐日満洲国大使館『満洲国留日学生録』1936~1937年度, 「満洲国留日学生録目次」。
- (8) 駐日満洲国大使館『満洲国留日学生録』1938~1941年度, 各年度「例言」と補助費生と貸費生の在学名簿による。
- (9) 2009年8月17日, 筆者の李継庸への電話インタビューによる。
- (10) 2008年10月3日付, 史氏から筆者への手紙による。
- (11) 拙著『中国人女性の日本留学史研究』国書刊行会, 2000年2月, 275-278頁を参照。
- (12) 2010年8月15日, 16日; 2015年1月4日, 5日; 2015年3月30日。
- (13) 柯若儀の卒業証書, 『从医執教60年記念冊』2006年, 写真など。
- (14) 2009年9月8日付; 2010年4月3日付; 2010年5月8日付; 2014年11月8日付。
- (15) 中国研究所『中国研究月報』, 2010年9月号。
- (16) 女子留学生の増加にあたって, 財団法人「満洲国」留学生会館理事会は, 牛込弁天町に男子寄宿寮を建設する計画を変更させ, 女子留学生のための会館建設を決めた。この会館は, 1939年4月に着工し, 11月に竣工した。以来, 毎年集団で日本に来た「満洲国」の女子留学生は殆ど牛込女子留学生会館に宿泊し, 数か月の会館生活後, 各学校へ向かうことになった。
- (17) 1943年度の『第17回 中華民国留日学生名簿』(財団法人日華学会, 昭和18年(1943年), 34頁)名簿に予科生は13名であるが, 1942年度の名簿と照合した結果, 1942年度入学したのは5名, 1943年度の新入生は8名になる。
- (18) 2010年8月15日, 筆者の柯若儀へのインタビューによる。
- (19) 中華人民共和国建国(1949年10月1日)前に共産党政権の仕事に参加した者に対する離職休養制度である。退職と違い, 給料は100%継続に支払われ, 医療費用もすべて国負担である。